風の剥製・壹

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献ず

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。その文章は、なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、数冊の私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実世界に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、多数の読者を獲得出来る術もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの数百年を、電脳の海に沈めておくべしと決意し、ここにそれを行うこととする。

未遂の領分

序：あるいは未遂の美学

句集『未遂の領分』を手に取る読者は、まずその言葉の端々に宿る「冷徹なまでの美意識」に圧倒されるに違いない。「廃帝の玉座濡るるや魔都の春」という劈頭の響きからして、我々が日常立脚している平穏な大地はすでに剥落し、異界の幕が開いているのを知るのである。著者が描き出す世界は、常に「境界線」の上にある。「春ゆふべ鍼力の喇叭鳴りやまず」、「未遂にて了はる人生（さだめ）や除夜の鐘」。成し遂げられることのない事象、あるいは成就を拒む意志。それこそが、本書を貫く通奏低音である。

読者は覚悟されたい。この「未遂の領分」に足を踏み入れることは、自らの影法師を「ワキとしてのみ生きて」ゆく、果てしない虚構の旅の始まりであることを。

目次

色彩の曠野 ——07
海市の座標 ——17
餘白の餘白 ——27
ヂギタリスの閾 ——37
聖なるアナグラム ——47
深爪の黙示録 ——57
凍蝶の域 ——67
骨壺の正月 ——77

色彩の曠野

秋の日やルソォの青といふ淵に

オフィリアへ極まる菜の花明りかな

蜷栗啓く王女の欲(ほ)りし首白し

花いちもんめ櫻明りにひとり減る

春疾風（はるはやて）追ふは遁走曲（フーガ）の咎であり

朧夜や春畫の端の煙草盆

舌先を白く濆して春の雪

昨日なく今日なき空の石鹸玉（しゃぼんだま）

西行忌ただ曠野なる夢の果て

海市の座標

一音（いちおん）を研ぎて一音　武満忌

櫻桃忌愁ひの皮膜膚（はだへ）とす

雛の顔あたりに闇を餘(あま)しけり

春雨や愁ひに致死量あるごとく

應爲描きし悪所の闇に花ミモザ

曠野吹く風の眞中を蝶の徑（みち）

海圖にはなき一點に海市消ゆ

平假名の淡きをなぞる櫻貝

さくらがひ潮のみちくるまへのおと

餘白の餘白

櫻散るあとの餘白にまた餘白

白鍵のファのみ狂へる春の闇

沙羅落ちて驛に老女の遺失物

書きかけの戀文（ふみ）仄白き遠花火

裏聲の讀經（どきやう）や左大文字

薄暑とはトワレの壜の青き翳

行夏や風の剥製残す濱邊（はま）

螢狩闇の匂ひを掬ひけり

掌にしたたり落つる螢かな

チギタリスの闘

夏の朝穹（そら）の青さを穿つ鳥

數歩より先は空なり鳥渡る

壺庭の方形（はうげふ）に積む蟬時雨

一（いち）に神あとの一つはデギタリス

童貞やベッドサイドに薔薇のジャム

夜の桃嘴（はし）ある影に啄（ついば）まる

黒葡萄夜の一粒零しけり

月蝕やなべて貌（かほ）なきものの貌

愛咬の痕のひとつを寒椿

聖なるアナグラム

雪の夜や獨りであそぶアナグラム

風に舞ふものは枯葉と定義する

風花や孤島に竝ぶ碑の欠片

白き嘘吐く處女ありて眞冬かな

恩寵の黒きに咲ける冬薔薇（ふゆさうび）

一行の暗號解けず冬銀河

凍蝶の滅ぶ最中（さなか）の世界かな

わが肉や眞夜の海鼠の闇を這ふ

聖夜かな翼持つもの降り積もる

あるひは深爪

陽光や蒲公英の黄を刻みだす

深爪の肉じんじんと櫻桃忌

薄氷（うすらひ）へ小指の熱を頒（わ）かちけり

呪詛として中島みゆき浴びる夏

櫻散るエンドマァクの嘘くささ

梅の香と雲の一朶が遺留品

涅槃西風花見小路へ情死行（ねはんにし）

アンゼルム・キーファーといふ名の黙示　原爆忌

滅びゆくわれらが種族薔薇を断つ

凍蝶の域

廢帝の玉座濡れたる魔都の春

丑寅の闇の上座に据ゑし雛

川底に兇器眠りし花見かな

人麿忌賽銭箱に鍵の穴

病むときも汝を愛せ萬愚節

花筏素木（しらき）の柩載せ　曙光

春疾風（はるはやて）根こそぎ持つてゆきにけり

鐵（くろがね）のストーヴに焼く前世かな

凍蝶の翅ひらくまで永劫（とは）の域

骨壺のなか

皐月かな身體の底に青き澱

空間も時間も歪めかたつむり

人の世を脱けて白衣や更衣（ころもがへ）

バタイユ忌眼球模型賣られけり

一握の光子へ還る螢かな

天と地に一線引くや秋櫻

皐月闇消えてなくなる人のゐる

朋ひとり失せし苦みや蕗の薹

骨壺のなかは正月かも知れぬ